

第39回教育論文集発刊に寄せて

審査委員長

菊池 龍三郎

1. 審査経過

今年度応募された論文数は全部で125編、約40年に及ぶ本事業の歴史で最も多い応募数でした。応募された先生方の意欲に対して心から敬意を表するとともに、本事業の意義と役割について県内の小中学校、ならびに各高等学校や特別支援学校の先生方に積極的に周知を図り、研究への取り組みを勧め、支えて下さった多くの関係者に心からお礼を申し上げます。今年度の応募状況では、小中学校や特別支援学校だけでなく高等学校からも昨年に引き続いて応募があったこと、さらに、県内のどの地域からも従来よりもムラなく応募者があったことを大変喜んでおります。さらに、教科別・分野別に見てもおおむねバランスよく応募があったと感じています。もちろん、例えば教科では社会科などもっと応募してほしい等の希望はありますが、これは来年度以降に期待したいと思っています。

応募論文125編を、私たち15名の審査委員に加えて、義務教育課、高校教育課、特別支援教育課の全面的な協力を頂いて審査に当たりました。

その結果、最終的に最優秀賞1編、優秀賞10編、優良賞23編を決定しました。この他に奨励賞を4編選んでおります。ひとつひとつのご紹介は省きますが、受賞された先生方の論文はいずれも大変お忙しい中であるにもかかわらず、しっかりとした研究計画のもとに研究を進めており、実践についての論述と考察の仕方も適切で十分に受賞に値する研究論文であったと評価できます。もちろん、教育実践の研究として見た時、いずれの研究論文もまだまだ努力して頂きたいところが少なく、今後さらに実践と思索を積み重ねながら研究を継続して頂きたいと期待しております。

これらの中で最優秀賞は、つくば市立竹園東幼稚園の矢口和美園長を中心とする研究グループによる「小学校の学びとの連続性を意識した、一人一人の感性を豊かに育む創造的な保育の実践—感動し、表現し、伝えようとする心の芽生えを大切に—」に決定しました。幼児教育や家庭教育の充実強化が喫緊の課題として認識され、国ならびに本県においても施策の充実が図られているときに、本研究は幼稚園教育を新しい内容と枠組みによって構想し、実際に新しい保育実践にトライアルしているもので、今後多くの幼児教育関係者が同じような取り組みをされるときに十分に参考になる研究になると思われます。なお、これから教育論文に挑戦してみたいと思っている先生方にまずやって欲しいことは、いい研究論文に目を通すことです。そこから多くの有用な指針を学び取ることができるからです。その意味でも本会のこの研究論文集は、大変参考になる道標となるものです。

2. 論文作成のポイント…審査委員の希望

論文作成に取り組む場合、審査委員がどのような観点から評価するのか、言い換えればそれをしっかり踏まえておけば読み応えのあるいい論文が作れる、というポイントを知っておく必要があるか

と思います。これは昨年度の論文集でも述べたことですが、今年度も大事な観点をいくつか取り上げ簡単に説明したいと思います。

① 論文の概要、目次、頁、資料番号、記号等はきちんと付されているか

ときどき論文概要が欠けていたり、頁数が付けられていなかったりする論文もあります。論文の形式に不備があっても内容がよければよいのではないかという意見もあるかと思いますが、論文は人に読んでもらい理解して貰うコミュニケーション手段です。そうである以上はこれも論文の基本的な条件です。不備がないかどうかチェックしてから提出して下さい。

② 自分の研究の位置づけははっきりしているか

自分が取り組みたいと思っている課題が実は、誰かが既に研究し成果を公表済みということもあります。そこで研究に当たって、研究済み・解決済みの課題を単に繰り返すのではなく、その先行研究を検討し、それとの関連で今度は自分は何を明らかにすればよいのかを構想します。こうすることによって、新たに取り組もうとする研究は、より観点やねらいがはっきりした研究になるはずです。これは研究の特色づくりでもあると思います。

③ 研究テーマの捉え方に新鮮さが感じられるか

なぜこのテーマを取り上げるのかの理由、そのテーマを捉える視点、さらにテーマを研究する切り口などを見ると、しばしば中教審などの様々の答申類を機械的に引用したものではないかと思われる場合があります。そうした一種の借り物に頼るよりも、日常の教育実践の中で感じている疑問や必要感や願いを自分で独自に調べた事実やデータに基づいて主題化した方がより新鮮な魅力と説得力が感じられると思います。

④ 「仮説」というコトバを簡単に使い過ぎてはいないか

論文の最初の方の研究計画のところで研究の「仮説」を掲げることが多いと思います。このコトバの使い方を見ると、判で押したように、「もし〇〇ならば（すれば）△△（となる）であろう」というように形の上では「仮説」らしく書いてありますが、形だけで終わっている場合が少なくないように思います。簡単に言えば、「AならばXとなるであろう」という命題の形は、本来は、A以外のB、C、D、・・・では絶対にXにはなり得ないという意味の命題であるわけです。しかし、多くの論文における「仮説」は、そこまで厳密に整理検討しているとは思われず、A以外のBでもCでもXになるかもしれないという曖昧なもので、本当にこれは「仮説」なのかと疑問に思える場合が少なくありません。

さらに、「仮説」というのは、Xという結果になるのはAという証明方法の場合だけであることを様々な実践を通して実証的に証明することであり、先生方が論文を作成するための「研究計画」とはその「仮説」を証明する様々の過程を意味しています。

ただし、教育実践というのは実に様々な要因が関わり合っている事象であることから、そう簡単に因果関係が見えてくるわけでもなく、したがって研究においては、最初から自分で作ったすっきりとした「仮説」を掲げ、その仮説を証明することは難しい場合があります。研究内容によっては「仮説」の意味をもっと緩やかに「研究ではこのようなことをこうした方法・段階を踏みながら明らかにしたい」という意味で「研究のねらい」という程度に押さえておく方が適切であるとも考えられます。私たちが重視するのは、「仮説」というコトバにとらわれるよりも、むしろ「仮説」というコトバで言おうとしている「研究のねらい」を最後まで貫こうとする姿勢が大事ではないかということです。と言うのも、「仮説」というコトバを使いながら、研究の途中で「仮説」を忘れたり、見失っていたりする研究論文がかなり見受けられるからです。研究とは、

仮説の有効性や正しさを実証するために行うものであることを忘れないで欲しいと思っています。

⑤ 研究全体を計画的に進めようとしているか

研究計画とは、「仮説」（あるいは「研究のねらい」）を立て、その検証を順序立てて実証的に進めていき、結果を考察することで「仮説」が達成されたかどうかを判断し、達成できなかった場合にはどこに問題があるかを明らかにするという一連のプロセスですが、その計画を立て、計画にしたがって研究が進められているかどうかも研究論文として大事な評価ポイントであると思います。

⑥ 実践が単発的で研究的・継続的な積み上げが少ないのではないか

最近、応募数が増えてきているという嬉しい傾向と同時に、少し気になることもあると感じています。それは、単発的实践が多く私たちが期待する実践の継続による蓄積が感じられる研究が減ってきているのではないかとことです。これは、先生方の研究がその時その時の一時的な関心に基づいているということをおもうものではありません。ただ、先生方の研究に説得力を持たせてくれるのは、研究が先生方の持続的な関心に支えられているかどうかによると考えています。一時的な関心による研究は、どうしても読み手に対して説得力を与える力が不足するとの印象を持っています。

⑦ 文章表現や論証に用いる用語の使い方は適切か

教師の働きかけの結果としての児童生徒の行動の変化を記述するとき、「子ども達が生き生きと活動するようになった」、「みんな楽しそうに取り組むようになった」などの主観的評価語の羅列で終わっていないか留意してほしいと思います。教師の主観的な評価が問題だというわけではありません。ただ、研究における仮説の実証的な検証を行う以上は、教師のひとりよがりの評価記述に終わらず、できるだけ多面的多角的な評価を工夫することによって誰が読んでも納得のいく“客観的”な評価になると期待しています。ただし、客観的な評価というと、しばしば先生方はアンケート調査をすればよいと考えるかもしれませんが、しかし、アンケート調査をしても、サンプル数がたとえば10人と少ない場合、調査の信頼性は低くなってしまいます。アンケート調査が悪いわけではありませんが、信頼性を考えずにすぐに頼ってしまうのは安易な実証主義と言われるところです。

⑧ 参考文献にも関心をもって欲しい

参考文献にそれなりの書物、文献があげられていないことは、研究のバックグラウンドの深み、厚みと関わってきます。この書き手はよく考えていると思えば人は読書量も多い。最近ではネットで検索して誰かの論文をコピーする傾向もありますが、やはり自分で本を読んで欲しい。特にできるだけ先行研究を探し、目を通した上で、自分は誰の研究の何を研究のスタートにするか決め、それから研究計画を立てて欲しいと願っています。

以上、審査委員会での委員の率直な感想を紹介しました。これらのことを参考に是非今後も本弘済会による研究論文募集に積極的に応募して下さることを期待しています。